

# 炭焼き五郎兵衛の錬金術

——ユングのアニマ・アニムス論と民話の神学によせて——

栗 林 輝 夫

丹精したる地の内を訪ねよ。されば隠れたる石を見いださん。

(162)

(Visita Interiora Terrae Rectificando, Invenies Occultum Lapidem.)

ヴァレンティヌスの錬金術の定理

はじめに

他に発表した論稿のなかで筆者は、讃岐民話の「手なし娘」を神学的レクリチュールの資料として取りあげ、物語の主人公である巡礼女のお杉が、冥界にワープして弘法大師と遭遇し、喪われた両手を回復するという神秘主義体験の内容を分析した。この四国遍路の女は両手を得たのち、異類異形たちの異界から人間界に帰りつき、別れた恋人と再び出会って幸せを手にする。彼女の幸せは、長い孤独な魂の遍歴と試練をへた結果として得られたものであり、そ

の民話全体が、青年期の女性が自分を喪い、捜し求め、回復するといった成熟のプロセス、そしてその結末としての幸せな結婚という婚姻譚を重要なモチーフとしていたことはまちがいない。けれども若いヒロインが愛する男と再びめぐり合いました、生まれた子供を交えて華やかにお城に住み、死ぬまで幸福に暮らしました、めでたしめでたしといったところで、人の危機や再生をテーマとした民話すべては終わってしまうものだろうか。

もし民話やおとぎ話が、私たち人間が抱えているさまざまな普遍的課題を、象徴や記号、隠喩などをもって暗示的に論じているものだとすれば、<sup>(2)</sup>男と女が結婚した後になくなるのか、それについて言うべきことはないのだろうか。愛する相手を苦勞して捜しあてるまでは語っても、それから以後の夫婦関係の諸問題について何も言うことがないのだろうか。

「結婚は自分の犯した過ちを知る最も高い出費」とか「人が夢を信じられるのは結婚するまで」といったシニシズムはともかく、結婚生活においてはたえず相手を新たに発見し、互いの可能性を抑えつけず解放していくことが大切となる。相手の価値をあらためて認識し、それを自分のなかに統合していくことが重要になる。そうすることではじめて夫も妻も相手を従属させるような、言いかえれば支配・被支配の関係から互いに自由になることができる。それが結婚したペアがいっそう自分を生かしていく道なのだが、それは言うまでもなく決して平坦ではない。

さてこれから本稿で論じる物語は、二人の男女が結婚した後になどのように互いを、心理学の用語でいえば「自己実現」させていったかということに、ひとつの大きな焦点がある。つまりそれは夫婦関係の民話なのである。その物語は貧しくて孤独な炭焼きのところに、金持ちで身分の高い娘が押しかけてきて強引に女房となり、やがて炭焼きはその女房の知によって長者になるという筋書きである。讃岐地方に伝えられたこの民話の前半は女の求婚物語が中心になる。また後半ではその女の知によって、名もない炭焼き男が自分を完成していく次第が描かれる。この讃岐民話『炭焼き五郎兵衛』は、大きくは「炭焼長者」として『日本昔話大成』のなかで「運命と致富」譚に分類されているが、

それは讃岐だけではなく、全国各地にさまざまなヴァリエーションをもって伝えられている話である。<sup>(3)</sup>ではその夫婦のラヴ・ストーリーをひとまず紹介してみよう。

むかしむかし。

大阪に鴻の池という名のたいした長者がありました。

鴻の池には一人のいとはんがありました。年頃になりましたが、大きい長者のことですから、なかなか釣り合う縁談がありません。

そこで易者をよんで来て見させると、「貴方はこの辺には縁がないけにあきらめてくれ。じゃがどこも所はささぬが、おくのおくの奥山の、おんごく（山の奥）の炭焼き五郎兵衛に縁がある」と申しました。そこで鴻の池のいとさんはおくのおくの奥山のおんごくまで、炭焼き五郎兵衛を探しにいきました。山のおんごくに行ってみると、五郎兵衛が一人で住んでいました。五郎兵衛はひとりもので、日がな一日炭を焼いてくらししておりました。

鴻の池のいとはんが、「わたしは鴻の池の娘じゃが、易者があんとところに縁があるから行けと言うからやってきた。どうぞ嫁さんにしてつかさいな」といいました。

五郎兵衛は「こななざまくい（汚い）ところに」と断りましたが、どうしてもというので嫁さんにもらうことになりました。

五郎兵衛は嫁さんが来てからも、毎日毎日まっくろけになって炭をやっています。

ある日のこと、鴻の池のいとさんが、「これをもってお米を買ってきつつか」と、小判をさしだして買い物頼みしました。五郎兵衛は、これはけつたいなものをくれたと思いましたが、そのままもって里に出掛けていきました。

とちゅうの川のところまでくると、鶴が二羽あそんでいました。五郎兵衛は鶴をおどかしてやろうと、小判を出し

てぶつけました。一枚なげても鶴はとびません。五郎兵衛はもっている小判をしまいにはみんな投げてしまいました。そしてもう在所にいてもしかたないと思い、ぽっかり帰ってきました。

鴻の池のいとはんが「はよう帰ってどうしたんな」と聞きますと、五郎兵衛は「鶴をびっくりさそとと思ってぶつけてきたんじゃ」と言いました。鴻の池のいとはんはびっくりして「あれは小判というもので、大切なおたからじゃ」と、五郎兵衛に話してきかせました。それを聞くと五郎兵衛は「あんなもんは、家のうらにぎょうさん重なつとるぞ」と言いました。

そんなはずはあるまいと鴻の池のいとはんは思いましたが、うらの炭焼く釜場のところにいくと、なるほど土のなかからいっぱい小判がでてきております。見ると大きなかめのなかから小判がまけあふれていました。いそいで掘ってみますと、かめの中にはまだぎょうさんに小判が入っていました。

二人はその小判をもって里に出て大きい普請をして、炭焼き五郎兵衛というたいそうな分限者になりました。

### 結婚しない女

鴻の池のいとはんはたいそうな富豪のひとり娘である。お金持ちの家のお嬢さんのことだから、それに釣り合うだけの家柄と財力をもった婿を探さなければならぬ。これは大ごとだ。親はあれこれと注文をつけて物色するのだが、なかなか条件にかなった婿候補が見つからない。

この讃岐で語られるいとはんは明らかにまだ嫁いだことがない。けれども讃岐の隣り、阿波の美馬郡の話では「鴻の池の娘は一三軒嫁といって、嫁に一三軒いって婿殿に去られる」と語られている。また島根県邑智郡では「下関の長者の娘が四九たび嫁入りして不縁になる」と述べられていて、それらの富豪の娘は結婚するものの、うまくいかな

いことをプロットにしている。<sup>(4)</sup> そうした話のなかで、娘たちは親の言うままに嫁ぐものの、どれもこれも結局ダメになつて出戻ってくる。女房が一所懸命につくしても夫たちはまったく高慢ちきで、金を浪費するだけのわがままな男どもばかりだからである。外で遊び歩いては家に寄りつかない放蕩な亭主たち。女たちは堪忍袋の緒を切り、覚悟をきめて家や倉をそのまま残して逃げ帰ってくるのである。

親が勧める縁談にのつてはみたものの、夫は夕食にも帰らず妻はじっと待つだけ。やっと帰ってきて、麦飯のお膳が気にいらぬといつては、それをひっくりがえすような横暴。そんな振る舞いを男たちは当然のことのようにしでかす。そして女たちが心に深い傷をおっていることさえ気づかない。

君を待つ土曜日なりき 待つという時間を食べて女は生きる

「また電話しろよ」「待ってるよ」 いつもいつも命令形で愛を言う君

俵万智『サラダ記念日』<sup>(5)</sup>

私たちのヒロイン鴻の池の娘も、はじめは親の言うままに良い花婿がやってくるのをじっと待つ、「シンデレラ・コンプレックス」型の女性だったようだ。<sup>(6)</sup> ようよう婿の候補者が選ばれて縁談がすすみ、いざデートとなつても相手は女に待つこと、忍従することを当りまえのように求める男たちばかりだったのかもしれない。なかなかうまくまい結婚相手が決まらないという筋書きから想像をたくましくすれば、彼女はもうかなりの齢になつていたかもしれない。しかしそうしたことで一生幸せをつかめない。そのことに彼女はようやく気づいようだ。娘は待つ女であることを止め、自分で花婿を捜しだそうと覚悟をきめる。ここに物語前半の大きな転換がある。

ここには伝統社会の婚姻をめぐるの、女性に特有なひとつの葛藤が見られるといつてもよいだろう。世に言う「女らしい」「おとなしい」「気だてが良い」娘という性格であればあるほど、すなわち後に述べるユングの、アニメス

という心の決断力や積極さの気質が抑圧されればされるほど、若い娘たちの生は周囲の勝手な台なしにされる危険が大きい。自分を押し出すことができずに親が勧める縁談のままに動き、結婚後もとうとう最後まで相手に愛を抱くことなく人生を棒にふるってしまうケース。相手の男が自分の価値や世界観とまったくかけはなれた考え方をもっていたり、暴君であったりするのを、親が選んだからといって嫁いでしまう。そんな女たちの結婚生活はため息ばかりにちがいない。

いや嫁ぐならまだしも、両親があれこれ引きとめるので結婚すら言いだせない娘たちも伝統社会には少なからずいた。親の言うことにずるずると引きづられ、とうとう家を出られず親の面倒を見る娘たち。恋人や結婚のことをほめかすと、すぐにあれこれと反対されるような女たち。親は娘がいなかったらやってゆけないとタメ息をつき、他方、娘の方も私がいなかったらという罪の負い目に押しつぶされる。父権制社会における娘たちのこうした葛藤問題は、つい最近までそれほど稀なことでもなかった。

小津安二郎の映画には、この種の心のゆらぎをもった戦前・戦後期の女たちのケースがいくつも巧みに描かれている。小津の代表作『晩春』に登場するヒロインは、父親にたいする彼女自身のエディプス・コンプレックスが強いのも一つの原因だが、自分が結婚したら誰がお父さんの面倒を見るかが心配で、なかなか結婚に踏みきれない。また『秋刀魚の味』に出てくる隠退教師の娘のケースもその好例である。引退した中学の老教師は、今や社会的に活躍している教え子たちに久々に囲まれて大いに愉快だ。しかし酒を飲み交わすうち、教師は酔って「わたしは失敗しました」と愚痴を繰りかえしはじめ。教え子の一人が、先生いったい何が失敗なのですかと尋ねると、彼は「いや、つい便利に娘を使いすぎた。嫁にやる話しもないではなかったが」と低く呟きかえす。やがて宴も終わり、教え子の数人が酔った教師を送って家を訪ねると、路地の奥の貧しい玄関をガタガタと開いたのは、今ではもう中年になった教師の娘である。彼女の顔は生活に疲れはてて暗く精彩がない。家から出られずに親の面倒をみながら齢をとっていく彼女

の、しんから温和で柔順な生は、まるでトラックの車輪に縦輪されて押し潰されてしまったかのようだ。

しかし私たちの民話の主人公は、そうした受身で伝統的な女のステレオ・タイプやロール・プレイを拒んで、結婚を自分から言いだしはじめた。日本型家制度の秩序に安住し、とくに父親にたいして強いエディプスの執着を抱きつづけるような、「永遠の少女」(Puella aeternae)であってはならないことを悟ったのである。

### 抱かれる女から抱く女へ

そのきっかけになったのは「易者の占い」だったと、この民話は物語っている。他の同系の話では「夢のお告げ」とも「倉の神さま」の声を聞いたためだ、ともされている。易者にせよ、夢のお告げや倉の神にせよ、それは娘たちの心の奥深くに生まれた危機意識と無関係ではない。このままでは真に生きられないという彼女たちの思いが、夢の中で倉の神や易者という姿に象徴化されたのである。いや、もっとそれは宗教学者エリアーデがいう「聖なるもの(7)の顕現」(hierophany)とも言うべきものだったかもしれない。夢や易者の口を借りて女たちに語りかける「神」とは、跳躍エランをもとめる根源的衝動の力だった。それは魂の内に秘められた解放的意志の力である。

なるほど鴻ノ池の娘という生活は、蝶よ花よの毎日で何不自由ないだろう。それはあらゆる点できわめて安逸で快適なライフ・スタイルだっただろう。しかしそれは彼女にとって、物質的には快樂的でありながら、精神的には真綿で首を締めつけられるような毎日だった。そうした彼女には荒療治が必要だ。このままでは立ちゆかない。行動すべき時がきている。そのことを根源的に聖なる力が彼女に意識させた。親のいいなりになって、良い娘を演じるナンセンスは終わりにしなければいけない。いつ来るかもしれぬ白馬の王子をじっと待ってはいられない。抱かれるのを待ちつづける娘から、むしろ抱く女へと飛翔しなければならぬ、と。

ヨーロッパのメルヘンで、父親への過度な執着を断ち切らなければ、若い娘は愛する相手を決して見いだせない警告しているのは、ギリシャのアプレイウス神話『アモールとプシュケー』である。若く美しい女神プシュケーは、恋人アモールを捜し求めて下界へ降り立とうとする。そのとき占い師（またしても！）がプシュケーにこう忠告する——汝が旅に出ようとするとき、ステュクスの水中から哀れな老人が浮かび出て、必死に助けを呼び求め、汝を引きとめようとするだろう。けれどもそれに心を揺さぶられてはならない、その声に引き寄せられてはならない、と。肉親、とりわけ老いた父を置きざりにしたくないと思う純真な娘たちは、母性的な心にひきずられる。女の抱擁的本能は、よるべなく困窮する全ての者に魂を揺さぶられるにちがいない。それはたしかに大切な心である。けれども過ぎた同情はしばしばその反対に転じてしまう。同情という美德にひきずられて、知らず知らずのうちに自分自身の実現を損なってしまう例は少なくない。いや、よかれと配慮した相手の自立や成長そのものさえ、かえって妨げるケースはいくらでもあるのだ。

親は娘や息子が永遠に子供であって手元におければ、という密やかな願望をもっている。とくにフロイトが分析してみせたように、父親は娘にたいしてその執着がいつそう強いのかもれない。讃岐と瀬戸内海をさんだ対岸、吉備の民話『乙女椿』では、長者の父は目に入れても痛くない一人娘が、貧しい漁師に恋したことに嫉妬して、二人の仲を引き裂こうとする。美しい娘は父親と若者との板挟みになって気を狂わせ、海に身を投じる。やがて娘の遺体が浜に流れつくと、その場所に美しいツバキの花が咲いた。その花は夜になるときまって、漁に出た若者を慕うように青白く光りだす。<sup>(8)</sup>

グリム童話の『眠り姫』に登場する父王も、娘が成長しても初潮がこないように国中の糸紡ぎ器を集めて燃やしてしまうし、<sup>(9)</sup>『オル・リンクランク』では、父親は娘を手放すまいとガラスの山を築く。そして娘と結婚したいと申しでる若者たちに、その尖ったガラスの山を越えなければならぬと無理難題をふきかける。<sup>(10)</sup>



こうしたメルヘンに登場するヨーロッパの父王にしても、日本の乙女椿の長者にしても、彼らの執着は娘をいつまでも所有していたいという欲望の投影として解釈できるだろう。フロイトが分析してみせたように、父というあり方は自分の娘を性的にも妻にしたいと心の底で願うものなのかもしれない。しかし娘はそうした親の暗いリビドーを自らの手で退治して、自由を獲得しなければならぬ。『聖ジョージの竜退治』の絵画が示すように、父というドラゴンを撃退し、自分自身を救い出さなければならないのである。

### ビートルズの『シーズ・リービング・ホーム』

さて鴻ノ池の娘がやっとのことで親の執着を退治して、自分で選んだのは、あるうことか炭焼きの五郎兵衛だった。いったい人の一生というのは絶え間ない選択のプロセスである。それは何を食べ、何を着、どこに住み、どこで学び、どんな仕事につくか、何をして働くかといったことを、たえず自分で決断していく過程である。親や他人にいつまでも衣食住をあてがってもらい、学校も職場も選んでもらい、ついでに配偶者も決めてもらうといったカリカチャア的人生は、もちろん自分を自律的に生きているとはとても言えない。たとえ敗北を覚悟してでも自身で運命を開き拓く。生きるというのは、確かにそうした選択を実存的に繰りかえしていくことにほかならない。

私たちのヒロインが神託によって選んだ花婿が、一介の貧しい炭焼きだったというプロットは興味深い。炭焼きは社会的に地位ある父と対極的なイメージである。聖書の物語においては、多くをすでに所有している者、失うことを恐れて今あるままに身を保とうとする者には、探し求めるものを見いだすチャンスは少ないことが述べられている。「自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである」ルカ一七・三三。イエスは弟子たちに、裕福な者が神の国に入るのは、らくだが針の穴を通るよりも難しいと言う。そのときペテロはただ

ちに「私たちは何もかも捨てて」イエスのところにやって来たと告白する（マタイ一九・二三―二七）。ここで暗喩されているのは、金持ちの階級性といったことだけではない。それ以上に何一つ捨ようとしないう者、既得の権利や価値を維持しようとする者は、また何一つ見出すことはできない事実を示している。<sup>(11)</sup>

親の示した道筋が人生を予め決めてしまうのなら脱出（エクソダス）は失敗し、後に見るような、主人公が貧しい炭焼きの隠された宝を発見することなどなかったにちがいない。もし鴻ノ池の娘がそれまで馴染んできた規範やルー、歌と踊り、美しい家と財産、強者崇拜と富のフェティシズムを捨てなかったなら、何一つ新しい価値をそれから的人生に見いだすことはできなかっただろう。親の価値観を踏襲し、釣合いのとれた富豪の婿をいたずらに捜し続けていたのなら、新しい生は開かれず、彼女は両親の家ですでに味わっていた空虚さを、そのまま継続するしかなかっただろう。いや実際、下関の長者の娘や他の系統本の娘たちは皆、結婚に破れて深く傷ついて逃げ帰ってくるのである。

ビートルズの「彼女は家を出る」(She's Leaving Home)は、バロックやクラシック的な器乐的の要素が採用された、たいへん叙情的なメロディをもつ作品だが、鴻の池の娘と同じように、ただ物質にこだわる生が人を充足させない事実の社会注解的な歌でもある。<sup>(12)</sup>それは、両親がワークホリズムとモノの消費という、現代社会の二つの偶像の虜となっていて裏腹に、魂の満たされない娘の気持を批判的に綴っている。父親は金を稼ぐことが娘を幸せにすることだと思いきこんでいる。そして夜遅くに疲れはてて帰ってくる。母親はショッピング・モールに買い物に出掛け、物を買って与えることが娘の喜ぶことだと勘違いしている。そして出掛ける前も帰ってきた後も、気がたつていららしている。二人はモノを私的所有する生活に自己実現を見いだそうとしている。しかし娘は拝金主義と消費主義の、こうした大人たちの既成世界に限りない不安を抱く。モノでかためられた人生が、実はウソでかためられた人生だということを見てとる。彼女はそうした消費社会のメカニズムの中に組み込まれることを、最後の力を振り絞って拒け

る。そして遠くへ、出来るかぎり遠くへ逃走しようとする。

水曜の朝五時、一日が始まるとともに

彼女は寢室の戸を静かに開き

分かってもらおうと書き置きを残して

ハンカチを握りしめて、台所へと降り

裏戸の鍵をそっと廻して外に歩みだす

彼女はもう自由

「私たちは人生の全てをあの子に与えたのに」「生活の全てを犠牲にしたのに」「金で買える全てをあげたのに」と両親の嘆きの声が曲の背後にリフレインされる。「自分のことなんかこれっぽちも考えず」「ただあの子のために懸命にやってきたのに、なぜ」と、二人は今家にはない娘に問いかける。しかし娘は「ずっと長い間孤独で生きてきた」のだ。父親も母親も「仕事」と「スーパーマーケット」に支配されていた。過剰な、しかも道を誤った欲望の在り方に虜にされてきた。けれども彼女は「長い年月、いつも拒絶されてきた内側のあるもの」(Something inside that was always denied / For so many years)を捜したい、そのために旅立ちたいと願う。彼女は、所有への異常な熱意にからめとられた両親の世界と、そしてそれまでの自分に別れを告げて家を出る (She's leaving home / Bye bye)。

### 過剰な欲望からのエクソダス

鴻ノ池の箱入り娘を突き動かして家を出させたもの、それは既成の価値から自由になりたい、そして別の生を歩みたいという憧れだったにちがいない。両親の家にはないものを探しとめ、全体であろうとする願い——それ

はモノにこだわるフェティシズム、消費と競争の世界に対する惧れと否であり、「人はパンだけで生きるものではない」(マタイ四・四)ことの意識化である。そしてそれは何か特異なものではなく、飽食した現代、過剰な欲望の時代を生きている多くの青年たちの心情でもあるにちがいない。

讃岐の民話に話しをもどせば、ヒロインの娘は豊かな家をあとにして、モノを一切もたない炭焼五郎兵衛の山奥へと出かけていった。そして積極的に自分からプロポーズをした。鴻ノ池の娘はシンデレラ型の少女のように、ある日王子が白い馬に乗って迎えに来てくれるのをじっと待ってはいない。彼女の性格は強靱で勇気がある。「わしのような者が、あんたのようなりっぱな人を妻にしたら罰があたる」と五郎兵衛がしりごみするのを、「わたしの望みだから、ぜひ嫁にしてください」と頼み込み、とうとう承諾させてしまう果敢さをもっている。五郎兵衛は明らかに身分の差、貧富の差を口実に断ろうとするのだが、それを承知のうえで彼女は五郎兵衛と結婚する。日本のユング派心理学者河合隼雄はここに、伝統的規範のパラダイムをこえた新しい女性像が遺憾なく表されていると論じているが、それは、<sup>(13)</sup>家制度のもとで男性的エゴの固まりのような夫に柔順につかえるよりも、むしろ家を飛び出して炭焼きを伴侶として選ぶ彼女に、深い知のありかを見るからである。河合によれば、そうした大胆な女の知恵が、やがて五郎兵衛の隠された才能をひきだす積極的な役割を果たしていくことになる。

新約聖書の福音書が描き出すイエスも、人に新しい名前、すなわちアイデンティティを指すことで、その人が秘めている価値やタレントを引き出すカリスマ的性格をもっていたようだ。「バルヨナ(ヨナの息子)シモン、あなたはさいわいだ。……あなたはペテロである(すなわちギリシャ語のペテロスから岩を意味する)」(マタイ・一六・一七―一八)。イエスからあなたは豊かな人だと言われてペテロは驚愕する。それまでペテロは、自分にとるに足りないガラヤの漁師だと思っていたからである。だからペテロがそれを聞いて最初にイエスに言った言葉は、「主よ、わたしから離れて下さい。わたしは卑しい者です」(ルカ五・八参照)と言うものだった。五郎兵衛が鴻ノ池の娘に出会ったとき、

「わしのような貧乏者を」といって彼女を避けようとしたのとそれは同じだ。しかしイエスは出会ったペテロを魅了して放さない。そしてその内的な才を強引に引き出して新しい自分を発見させ、やがてペテロはキリスト教史のなかで、十二弟子の筆頭 (*primus inter pares*) と目されるまでの人間的成長を遂げた。

人の才能や内的力というのは、他者との出会いや関係に触発されて開花する。なるほど美しい日没を眺めたり、花の咲きみだれる野でふくよかな香りに身をゆだねることで、心に眠る審美的才能が呼び覚まされる、ということはある。しかし経験ということがらの中で、もっとも強烈な刻印を刻むのは人との出会いである。もしあの人と出会っていなかったら、あるときこの人と知りあわなければ、という人生途上の経験は、誰にも払拭しがたい記憶としてあるものだ。

聖書のなかに描写された多くの人々の物語は、イエスとの遭遇によってその人生を変えられた物語である。上述したシモン (ペテロ) とその兄弟アンデレは、ガリラヤの海辺で漁師であったときにイエスに出会い「人をとる漁師」に転じた。ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネは、船の中で網を繕っているときにイエスに招かれ、そのまま彼らはイエスに従う人生を送った (マルコ一・一六―一〇参照)。また取税人のレビは徴収所に座った人生を過ごしているが、イエスが見て声をかけ、彼を立ち上げさせた。レビが立ち上がったのは、イエスによって新しい自分を見いだそうとしたからであり、もしそれがなかったなら、炭焼き釜の前に座っていた五郎兵衛のように、レビのそれからの生涯もじっと身をかがめるままだったにちがいない。

### 未知なるものとの遭遇

いったい鴻ノ池の娘がやってくる前、炭焼きの五郎兵衛はどのような問題を抱え込んでいたのだろうか。そして結

婚生活を続けるなかで、五郎兵衛の心のうちに何が起こってきたのだろうか。これまでの話の中心は主として鴻ノ池の娘だったので、後半の分析では、女に押しかけられた五郎兵衛の方に焦点を合わせて考えてみよう。物語後半のハイルイトは何と<sup>(14)</sup>いっても、貧しい五郎兵衛が女房の言葉を受け入れて宝を掘り出すこと、つまり男が女の知によって自己を成熟させるという点にある。

ユング派の精神理論からすれば、五郎兵衛にとって鴻ノ池の娘の到来は、内なるアニマとの遭遇として解釈することができよう。ユングの考え方によれば、男性の心の内には元来女性的なものが備わっており、これをユングはアニマ (Anima) と名づけた。逆に女性の心にも、アニムス (Animus) と呼ばれる男性的原理が隠されている。<sup>(15)</sup>つまり男の心にも女の心にも、対極の異性的な要素がもともとあって、広い意味で人の心というのは両性具有的とも考えていいのだ<sup>(16)</sup>というのである。その細かい議論はいろいろとあるようだが、いづれにしても男は成長するにしたがって自身の内にある女性的な要素を抑えつけ始める。青年期の男性はとくに女性的なものを自分の内に認めよう<sup>(17)</sup>としないばかりか、それに極端に反発する。そして無理やりこれを抑圧しようとする。この心のメカニズムは逆に女性の場合にも当てはまる。若い女性たちは少しでも男のような活発な振舞いをする<sup>(17)</sup>と、すぐにおてんばなどと周りから非難されるものだから、女たちは極力、男性的なものを表にあらわさないよう努める。そして社会の規範が求めるように、「女らしく」振る舞おうとする。

ある意味では、そうした行いは青年期のアイデンティティにひとつの確かな役割を示してくれる。思春期は混乱の時期である。ティーンエイジャーたちは男らしさ、女らしさについて単純きわまりない固定観念をもっている。わかりやすい男・女の二分法や、性差による明確な役割分担のほう<sup>(17)</sup>が安心できるのだ。実際、女性的なものに対する男の恐怖が強くなるのはこの時期だし、伝統的な男っぽさの役割を熱心に追い求めるのもこの時だ。それは若い男が自分のアイデンティティに一番不安を抱くときである。逆に少女たちも思春期になると、伝統的な女らしさの概念を尊重

するようになる。たとえそれがいろいろな拘束や束縛があつて、そうした役割を心の底では拒否していても、だ。

しかし男の場合も女の場合も、もともと備わっている異性的要素を抑圧しようとするのだから、当然精神的にいろいろ無理が生まれてくる。本当の自分 (Self) を実現するためには、この二つの対極的原理を統合することが絶対に必要になる。人が全体となるためには、自身の内側にある異性 (contrasexuality) との意識的な統合がなければならぬ。<sup>(18)</sup>

五郎兵衛はいとさんがやってくる前、なによりもまず自分の女性原理、アニマから切り離されていた。女性的なるものは、彼の意識の領域のずっと底に閉じ込められたままだった。五郎兵衛は山の中で一人きりで炭焼きの生活をしていた。五郎兵衛のわずかな女性的なものの記憶は、かつての母親の遠い姿だけだったかもしれない。その意味では五郎兵衛は、なりは大人でも幼児のような退行 (regression) のままにあった。まだ家においてグズグズしていた鴻ノ池のいとはんが、男を知らない箱入り娘、「永遠の少女」だったとすれば、五郎兵衛の方は、女性を知らない「永遠の少年」(Puer aeternus) だった。想像をたくましくすれば、五郎兵衛は支配的な母親を逃れようとして、山の炭焼きになつたのかもしれない。ガミガミと小言をいう母親はもうこりこりだと、女性一般に対して極度のコンプレックスをもつた中年の男だったのかもしれない。

かなりの年齢になつても、解放的な女性原理を自分の内に見いだすことができないでいた男の話としては、讃岐西部に伝承された『浦島太郎』の民話がある。讃岐に伝わる浦島太郎はもう若者ではない。彼はすでに中年の男性である。それでも太郎は嫁を迎えることもせず、母親といつまでも一緒に暮らしていた。つまり母親離れ、乳離れができていなかった。そんな太郎がある日、海に出ていつしかうつらうつら眠ってしまう。すると亀が水のなかから現れて、太郎を海の底の龍宮城に連れ出し、そこで太郎は美しく若い乙姫に出会う。海上でいつの間にか眠ってしまった、やがて海の奥底に旅行する——深い水や海、眠りといったものが無意識世界を示す記号であることからすれば、太郎は

自分の心の深層、無意識の領域に分け入り、やっと自身のアニマ、抑圧されていた女性的なるものと遭遇したのである。このとき彼は支配的で老いた母親ではない、美しく解放的力に満ちた乙姫を見いだすことになるのだが、中年男の浦島太郎の分析はまたの機会にゆずることにして、私たちの主人公五郎兵衛に話を戻しておこう。

ひとりぼっちで山の中で炭を焼く五郎兵衛には、それまで若い女性と出会う機会はまるでなかったにちがいない。だから馴染みない若々しい鴻ノ池の娘の登場に、五郎兵衛はビックリ仰天してしまったことだろう。突然の彼女の出現は、五郎兵衛の心に怖れを呼び覚まさないわけにはいかない。未知なもの、自分を脅かす可能性があるものに直面すれば、人は通常それを抑圧するか、なんとか認めまいとして懸命になる。事実「こななざまくさいところ」と、五郎兵衛は何とか口実を設けて、押しかけてきた女性的なるものを拒もうと必死になった。しかし未知なるものへの唯一の正しい対応は、それをしっかりと見据える努力する以外にない。結局、五郎兵衛はいとはんに押しきられてシブと彼女を嫁にする。女性的原理を拒み、あれこれと抵抗するのだが、女の熱意に負けてその存在だけは受け入れられるのだ。

自分とは異質な性のありかたを認めて、これを自分の内に統合する。ユングによれば、男はアニマと和解することなしに成熟することはない。<sup>(19)</sup> 逆説的な言い方をすれば、女性的要素を取り入れないかぎり、男は男にはなれないのである。グリムの『いばら姫』で、心を閉ざして眠ったままの姫が世界へと目覚めるためには、王子の口づけ、つまり抑圧された対極原理の受容が必要だった。それと同じように五郎兵衛にはいとさんが絶対に必要なだった。彼自身の「宝」が認識されるようになるためには、眠っている五郎兵衛の意識に揺さぶりをかけるアニマが不可欠だったのである。だが物語のこのステージでは、五郎兵衛はようやく女房として彼女を招き入れたものの、まだ十分に自分の内に取り込んだようには見えない。彼はあいかわらず一人で炭焼きの釜のところに出かけては、もくもくと炭を焼き続けているからだ。



夫婦だけで暮らす、人里はなれた山の中の孤独な炭焼きの家。それは五郎兵衛と女房の關係の狭さの象徴化でもある。二人が人里離れた粗末な小屋に住んでいるというのは、ただ貧乏というだけではなく、二人の關係がまだ極端に狭い世界に限られていることを暗示している。山の中の二人ぼっちの閉ざされた、貧しい家での夫婦生活。それは精神的にも社会的にも乏しく身動きできない状況である。それはさらに五郎兵衛の心そのものをも言い表しているだろう。五郎兵衛は鴻ノ池の娘を嫁を迎えてはいるものの、一人でただ炭焼きの釜に通って、じっと炭を焼き続けるばかりである。それは彼が非常に粘り強い性格の持ち主であると同時に、何かをじっと堪えて待ち望んでいる移行の時期にあることを示唆している。

### モラトリアム人間

毎日黙々とひとり炭焼き釜の前に座って炭を焼いている五郎兵衛——この姿は、人の生には意識的な活動が始まる前に、長い不毛とも思えるような期間、モラトリアムがありうることを暗喩している。いったい創造的な人間が新しい芸術作品や独創的な研究の業績を産み出す前に、さまざま不安や抑制の時間があつて、それをじっと耐えねばならないというのは意外なことではない。傍目から見れば、それは動きのない味気ない生のように映る。しかし少しでも注意してみれば、そういうときにこそ、これらの人々に将来のエネルギーが蓄積されていることがわかる。五郎兵衛が「小判」を発見するのは、他ならない自分の足下、それまで長く炭を焼いていた釜の下だった。五郎兵衛はそれと知らない間に、着々とやがて黄金となつて実を結ぶ力を蓄え続けていたのである。「毎日、毎日炭を焼いていた」という不毛で単調な時期は、心の中でなにか特別なものが準備されて蓄えられていることを意味している。

たとえば積み木をいろいろに積み上げては崩し、また積み上げてはあれこれと工夫している夢を見た人がいるかも

しれない。また象徴的画家ポール・デルボーが描いているように、駅のかたわらに立って汽車の車両の組み替えをじっと眺めている自分、といった夢を体験した人もいるだろう。<sup>(20)</sup> 組み替え作業場で、車両が何両もあちらこちらに移動しては新しい列車へと編成される。そうした夢は、精神分析学によると、無意識世界に心のエネルギーが新たに秩序立てられていること、力が蓄積されて出発を待っている状態を表わしている。<sup>(21)</sup> 民話の中にも、三年間もの長い間ブラブラと働かず眠って夢を見続けていた『三年寝太郎』の話がある。それは、人生でいっそう活躍をするために必要なエネルギーが圧縮されて蓄えられている期間を示す臨床例である。じっとして動かず「眠る」こともまた大切なだ。あせってはならない。

もちろんだからと言って、人は永遠に眠っていてもならない。もしもさまざまな宝を内に秘めていながら、それを掘り出そうとしなければ、まさに「宝の持ち腐れ」である。才を活用するための努力をしなければ、その才はないのと同じだ。人は自分で自己実現しなければならず、じっとして動かない眠りが生産的であるためには、やがてそこかためざめて自我を統合するための努力を払わなければならない。神学者ティリツヒは、福音書伝承のなかで、一人の青年がイエスに「永遠の生命」を受け継ぐためには、何をすればよいだろうかと尋ねる箇所（マルコ一〇・一七、マタイ一九・一六、ルカ一八・一八）を論じて、「永遠の生命に参与できるかどうかは、自己存在の本性を、現実の実存状況の中でそこから産み出されたものと、どれだけ創造的に統合しえるかにかかっている」と述べている。<sup>(22)</sup> ポイントは自身の深い魂と外界を統合することだ。

しかしやっかいなのは、ある種の人たちは、自分を駆り立てる創造的な世界があることを断念してしまっている、ということである。慣れ親しんだ、しばしば無意味なおきまりの世界に安住するだけで、人生の真の意味を発見する冒険にのりださないことである。社会心理学者の小此木啓吾は、そうした若い人々をさして「モラトリアム人間」と名称した。<sup>(23)</sup> E. H. エリクソンの「モラトリアム」概念を借用して自己流にアレンジしたわけだが、そこに言われて

いるのは成熟するのを拒否する青年たちの姿である。そうした人々は、自分を実現できるチャンスにあっても、消極的な傍観者のままでいようとする。外に魅惑的な世界があるのに、椅子に腰掛けて白日夢の毎日を過ごすだけ——そうした彼らには揺って眠りを覚ます事件が必要だ。

## 女の知

五郎兵衛の心を眠りから覚ます事件は、それからまもなくおこった。その事件はあるとき女房が五郎兵衛に向って、里に下りて米を買ってくるよう小判を渡したことから始まった。イニシアティブをとったのは、またもや女の方だった。どうも五郎兵衛というのは自分から進んで物事をしたり、人に会ったりするのを好んでいないようだ。およそ女房に命令されるのも好きではないが、そうかといって逆らいたくもない。そこで彼はしぶしぶ里に出かけていった。

案の定、五郎兵衛は渡された小判を鳥にぶつけたりして手ぶらで帰ってきてしまう。彼は村里に行っても、何をどうしたらいいのか皆目わからない。まるでなす術を知らないのである。小判を渡されて使いに出ても、したことといえば小判を鳥に放り投げて遊んだということだけ。五郎兵衛は里の経済システムの世界でまったく無力である。彼が自分が何を欲しているのか、何をしたら良いのか、まるでわかっていない。そうでなければ、せっかく渡された小判を鳥に投げつけて、さっさと帰ってくることをどう説明できるだろうか。<sup>(24)</sup>

この状況を変える働きをしたのが女房である。ぼっくりと手ぶらで帰って来た五郎兵衛を見て彼女はびっくりするが、しかし決して怒鳴ったりしない。五郎兵衛から事情を聞き、彼が鳥に投げつけたものが小判というお宝だと辛抱づよく説明する。すると、はたして五郎兵衛は、何だそんなものなら炭焼き釜のところ一杯あると言うのである。女房から話を聞いてはじめて五郎兵衛は、小判が何か貴重な願い事をかなえてくれるものだということに気づいた。

ここに新しい段階がはじまる。五郎兵衛は女房の言葉を自分と無関係にではなく、自分自身に関わらせて理解しはじめた。アニマの知の声に聞くことによって、無意識の世界に一杯詰っていた宝を意識の領域へと導きだすことに成功した。

結婚してから初めて五郎兵衛は自分からイニシアティブをとって、女房を炭焼き場に連れ出した。ここでしっかりと女房、五郎兵衛、お宝が識別される。アニマ、男性の自我、そして統合の豊かさが小判としてあらわれ得る。アニマの助言の力は、五郎兵衛に炭焼き釜に埋蔵されていた宝をみいださせた。実際、五郎兵衛の釜の下はたしかに黄金で満ちていた。黄金は「母なる大地」の中にいっぱい埋まっていた。それまでの五郎兵衛はそれが価値あるものどとは、まったく気づきもしなかった。しかし今や五郎兵衛は、アニマを自分の内にしっかりと統合し、宝を掘り出して成熟した男となることができた。

炭焼き釜から多くの小判を見つけた五郎兵衛の幸運は、まったくアニマたる女房の知の導きによる。小判が釜の底からざくざくと出てきたというのは、無意識の基底から豊饒なるもの、すばらしい価値あるものが提供されたことを意味している。いとさんの献身さと叡智が彼を眠りから覚まさせ、五郎兵衛の自我を十分に発展させるよう勇気づけた。五郎兵衛に働きかけて宝を認識させた女房——それはに古代グノーシス派の教義にでてくる、神の知恵を人格化した女性ソフィアを思いおこさせる。<sup>(25)</sup>炭焼き五郎兵衛は、これまで彼の内に押さえつけていた宝を、女の知によって大きく解き放った。以前には五郎兵衛は小判をわたされても、これはけつたいなものといったほどの思いしかもたず、だからそれを鳥にぶつけて手ぶらで帰ってくるしかしなかった。黄金の小判は彼自身の内にありながら、それにふさわしい輝きをもって五郎兵衛の人生に統合されていなかった。しかし今や五郎兵衛はお宝を見いだした。しかもそれは、どこか遠いところではなく彼の足下、いや実に彼自身の内側奥深くにあった。

「人間は自分の内側に、押えつけられた天使を秘めている」とフランクは言っている。<sup>(26)</sup>人はだれも五郎兵衛の光輝

く小判のように、自分の内に貴くかけがえない「神的なもの」、輝くばかりの宝を秘めている。キリスト教神秘主義の伝統にしたがえば、人は自分の内にある「隠された神」(Deus absconditus)を見いだしたときのみ真に確かとなる。人の魂の根底に潜んでいる神的なるもの、これを私たちの意識にたちのぼらせることによって人は救済されたものとなる。なるほど神は人間の心理以上のもの、いや全宇宙をも凌駕する。それはちっぽけな人間の心の領域に押し込められはしない。しかし神は私たちの魂と無関係にあるのでもない。「超越せる神」(God beyond man)は同時に「内なる神」(God within man)のめぐるめき弁証法をもつのである。<sup>(27)</sup>

「アウレリア・オッククルタ  
隠秘なる黄金」と五郎兵衛

「丹精したる地の内を訪ねよ、されば隠れたる石を見いださん」(Visita Interiora Terrae Rectificando, Invenies Occultum Lapidem.)とは、ヴァシリウス・ヴァレンティヌスの有名な錬金術の公式である。<sup>(28)</sup> 五郎兵衛が発見した「お宝」は突然に天から降ってきたのではなく、五郎兵衛がこつこつと働いていた炭焼の釜の下から出てきた。真っ黒な炭が、やがて燃えつきて白い灰になって炭焼き釜に溜っていた。そしてその溜った灰の奥底から輝くばかりの小判があらわれでた。黒い炭が白い灰となり、そして輝く金となる。あまり価値のない雑木が、黄金色の貴金属に変わる。これはもうすでに、ユングが分析してみせた錬金術の心理学的世界である。<sup>(29)</sup>

ユングはヨーロッパの中世に広く試みられた錬金術に、深い心理学的理解があることに気がついた。<sup>(29)</sup> ユングによれば、錬金術の始めの工程は黒化 (nigredo) である。そこではまずあらゆる物質がこなごなに分解されて火にくべられ、ドロドロとした物の原初的な状態にもどされる。それは心の場合におきかえれば、憂いや苦しみ、悩みに支配された古い精神がバラバラに解体されるプロセスである。それまでの人生で慣れ親しんできた生き方や価値、ものの考

え方やさまざまな思いが、まず粉々にされて焼かれ黒こげになるのだ。さらに錬金術の次の作業は白化 (albedo) の工程である。ここでは黒く溶けて炭化した物質はたえまない火をあびて白い灰となる。原初的な物質がいつそう浄められて、あらゆる不純物がとりさられる。これに対応する心のあり方は、人の魂に内に抑圧されていた葛藤や危機がすべて燃えつきて灰となるさまである。そしていよいよ最後の仕上げは赤化 (rubedo) の作業で、赤く輝く黄金が灰の底から取り出されるわけだが、それは人が無から情熱的な再生をなし遂げることの象徴である。黄金が造り出されたというのは、輝くばかりの若々しい生命力が魂に満ちあふれ得るということである。このようにヨーロッパの錬金術の作業工程は、そのまま魂の解体・浄化・再生というドラマチックな比喻となっている、とユングは言うのだ。<sup>(30)</sup>

山の雑木を釜の中に積み上げて火をかけ、真っ黒に炭化させて炭を作り出す五郎兵衛の仕事。雑木という価値もないものを、小判という貴金属に変化させる事の次第は、そのまま五郎兵衛の魂の変遷をあらわすのに充分である。すなわち孤独で閉ざされた暗い五郎兵衛の生き方は、鴻ノ池の娘が吹き込んだ熱情によって、いったん灰となって燃やされた。五郎兵衛がなじんできた社会的役割、生き方、価値観が捨てられた。それまでの生活のあり方が解体されこなごなになった。そしてやがて彼女の知の働きかけによって、輝くばかりの黄金色の人生へと変えられ、彼に新しい可能性が開けた。五郎兵衛は女房によって、ユングの言葉でいえば、それまでの「ペルソナ」が揺らいだ。彼はあらためて自分の内部を見つめざるを得なかった。そしてそれによって、彼は自分の足下、魂の奥底に新しい生命の根源的力を発見した。当然、小判には隠された意味、含意がある。小判という象徴は貨幣ということよりも、むしろここでは五郎兵衛がついに手にした成熟さ、実現された人格と解釈されるかもしれない。あるいは黄金の小判は年月を経ても変わることのない輝きからして、五郎兵衛と女房という両性の和解と解釈されるかもしれない。あるいはまたもっと、小判は成熟した生をつかさどる内的エネルギー、中世の神秘主義者や錬金術師たちが、神との触れ合い、靈感と呼んだものと理解してもいいかもしれない。

聖書において黄金はただちに神的なものではない。イスラエルの人々が黄金を神聖視して金の子牛を作ったのは大きな過ちだった(出エジプト三二・四)。けれども黄金が宗教的にも神聖なものの象徴となったのは、その後の歴史が示すとおりである。「全能者こそがあなたの黄金」(ヨブ記二二・二五)とヨブは教えられているし、また「主の榮譽が宣べ伝えられる」終末のとき、持ち運ばれてくるのも黄金であった(イザヤ六〇・六)。コリントの信徒への第一の手紙でも、世の終わりのとき、火のごとき試練に耐えうる貴金属のひとつに黄金が数えられているし、そのときの新しい生命のようすは、「ガラスのような純金」に輝く天の都という姿で象徴的に描きだされている(ヨハネ黙示録二一・一八)。また教父たちが黄金を神の王権の象徴としたのもよく知られてた事実である。

### 女が男を導く

北アメリカの先住インディアン、ホピ族の創造神話には、女たちが男たちを突き動かして、いっそう進んだ意識への根源の力となったと語るものがある。その神話によると、ホピ族の先祖は当初、地下の奥深くに住んでいた。ところがその場所がだんだんと過密になってきた。そこで女たちがワイワイと騒ぎたてて男たちを責め立て、男たちにもうひとつ上の洞窟に昇っていく道を探させた。そこもやがて人でいっぱいになると、女たちが男たちの尻をたたく。こうしてついに地上に出て、そこに楽園を見いだしたというわけだ。つまり女が男たちを含め、ホピ族全体を無意識の世界から意識の世界へと導く導火線となった、<sup>(31)</sup>というのだ。

この意味では、五郎兵衛の女房もちょうどホピの女たちに似ている。つまり彼女が五郎兵衛に自己開発をもたらした。女が男の潜在的能力を引き出し、教育し変革変えるように働きかけた。女房は五郎兵衛がそれと知らずに潜在させていた価値あるものを引き出し、それを役立てせる役割を演じた。すぐそこにありながら、充分に認識されていない

い内側の価値を、五郎兵衛が認識するように導いた。

五郎兵衛の女房は実に辛抱強い。彼女は五郎兵衛が毎日寡黙に炭を焼き続けるのをじっと見守っている。せっかく渡した小判を夫が投げ捨てて帰ってきたときにも、あきれて怒鳴ったりせず、じっと小判の意味を教えてこんでいる。女房の忍耐は、女性のおとぎ話に顕著なモチーフである。<sup>(32)</sup>それは何かを待っている。待つことは冒頭でも述べたように、受け身と無力のしるしと解釈され、伝統的な女性の典型的なイメージとされが、けれどもここではまったく違った図式を描き出す。女房は意識的に沈黙を選びとっている。彼女の待機は受け身的ではなく聡明で、夫に頼る無力な犠牲者というよりも、教師のように振る舞っている。女房はただ、五郎兵衛が精神的な発達において自分よりも遅れていることを認識しているにすぎない。そして相手が自分に追いついてくるのを待っているのだ。これはしばしば実際の生活でも起きることだ。夫婦のどちらかが急速に成長してしまうことはしばしばある。しかし女房は忍耐強く待ち、五郎兵衛が黄金を掘り起こし、より根源的な宝の意味を探り当てようとしむけるのである。

ここには隠された価値を見出す女の力が見事に述べられているとはいえないだろうか。<sup>(33)</sup>そしてこの女の知によって貧しい炭焼きは自分自身、そして女房、さらに広がりある里の人間世界というように、いっそう完全さを成就していった。五郎兵衛はこの体験を通して、この世界を有機的に結び付けている力と出会うことになった。いづれにしても、私たちは結婚生活において、互いに真に相手を認識し合うならば、彼らのように黄金という創造的な可能性を開拓できる。わたしたちの奥底に埋蔵されている「小判」を埋もれたままにしてはならない。私たちの魂の奥に内在する、救いと癒しをもたらす原初的な生命力、人間を根源で支える生命の基盤との邂逅をめざさなければならぬのである。



## おわりに

この物語においてアニメとしての女房の働きは、五郎兵衛に情熱の火を吹きかけて、貧しい炭焼き男のエゴを鍛えなおし、やがて埋もれていた自身の宝を発見させることにあった。炭焼きかまどの黒はこの点で象徴的だった。それは五郎兵衛の人生の暗い側面、すなわち孤独、苦悩、諦め、嫉妬、死といったものを表していた。それが女房の知によって、輝くばかりの黄金へと導かれた。物語の文脈からすれば、女房こそこの物語の主人公、黄金を作り出した陰の錬金術師だった。五郎兵衛のエゴはアニメによって道を教えられた。女房は五郎兵衛のエネルギーにはっきりとした形を与え、彼のエゴにうまく橋渡しできるような道筋を整えた。アニメとしての女房はしっかりとエゴに生命の力が豊潤に発揮できるよう具体性を備えた。彼女がそれは宝じゃといって、五郎兵衛にしたのはこのことだったのだ。女は五郎兵衛が自分とされるようその触媒となった。貧しい炭焼きを長者にしたのは、錬金術師の女房である。自身の内奥の活動から立ち表れてくる豊潤なもの、その体験はあまりに強烈でありドラマティックであって、それを論理的な言葉で表現することができない。それはただ「お宝」というような象徴的表現によってのみ、そこに含まれている豊かな内容を言い表わせたのである。

「二人は里に下りて長者になって暮らしました」。ここには、五郎兵衛がすっかり一人前の人間となったこと、新しい人間となったことが語られている。里に下りていったという語りには、閉ざされた山における貧しい夫婦の関係に生氣がふき込まれ、二人の状況全体がまったく新しく豊かになったことを十分に予感させている。そしてもちろんこの結末は、五郎兵衛だけではなく、女房も十分に幸せを手にしたことを示している。女房はもはや一方的に押しかけただけの女ではなくなっている。彼女は五郎兵衛に働きかけることによって、見事に錬金術師の技を発揮し、彼女自

身も同じように成長を遂げている。もはや彼女は五郎兵衛をただの炭焼きとして知るのではない。夫を「アウレニア・オックルタ隠秘なる黄金」をもつ異性として認識するようになっていいる。つまり五郎兵衛をかけがえのない伴侶、ユニークな存在として認めることができるようになっていいるのだ。一方、五郎兵衛のほうも妻を対等なパートナーの位置にいていいる。お膳をひっくりかえして妻を悲しませ、ついには離縁してしまうような、夫ではないのである。そしてそのことは彼女に自分の大胆な選択が正しかったという自信を与え、家を出たことが間違っていなかったことを明らかにしたことだろう。五郎兵衛と女房とは互いにあらためて会い、心の田を耕し、勇気いさんで卑の世界に下りていったことだろう。そしてやがて子を産み、それを愛をもって育てたことだろう。

五郎兵衛とその女房の話は、夫婦が真に生活を営むためには、そのどちらかを無視することはできないというものだった。なぜなら夫婦が完全になるということには、男性的力と女性的力の双方を必要とするからだ。面白いことに、この民話は夫と妻の伝統的な男女の役割を逆転させていいる。鴻ノ池の娘は花婿の相手を待つこともせず、自分から夫のもとへと押しかけ女房になっている。その上、夫に対して宝を認識させる、教えるという積極さをもっている。かたや夫の五郎兵衛の方は、グズグズ動かず、かえって女房に命令されてお使いにでかけたりしている。男女の役割の逆転はしばしば民話の重要なモチーフになるのだが、いづれにせよ、私たちはすべからく自らの内なる異性と出会い、それと和解しなければならい——そのことをこの民話は魅力たっぷりに描き出しているのは間違いない。<sup>(34)</sup>

〔註〕

- (1) 「民話の神学の試み——お遍路女の異界ワープ体験」『論攷・キリスト教学研究』ⅩⅤ、(関西学院大学、一九九六年三月発行予定)

- (2) Bruno Bettelheim, *The Uses of Enchantment: The Meaning and Importance of Fairy Tales* (New York: Vintage

- Books, 1977) pp. 2-19.
- (3) 関敬吾『日本昔話集成』(東京、角川書店、一九七二年)
- (4) 河合隼雄『昔話と日本人の心』(東京、岩波書店、一九八二年)
- (5) 俵万智『サラダ記念日』
- (6) コレット・ダウリング『シンデレラ・コンプレックス』(三笠書房、一九八九年)を参照せよ。
- (7) 聖なるものの顕現としてヒエロファニーの用語を用いたのは、シルチャ・エリアーデであって、それはギリシャ語における「聖」(hierō)と「顕現」(phainein)から成り立つ。Mircea Eliade ed., *The Encyclopedia of Religion*, vol. 6. (New York: MacMillan Publishing Co., 1987) pp. 313-317を見よ。またエリアーデの著作『聖と俗』『比較宗教における諸相』などを参照せよ。
- (8) 河合、前掲書、
- (9) Bruno Bettelheim, *The Uses of Enchantment: The Meaning and Importance of Fairy Tales*, (New York: Vintage Books, 1977) "The Sleeping Beauty" pp. 225-236を見よ。
- (10) 試みた若者たちはすべて失敗し跡形もなく消えてしまうのだが、とうとう最後に一人の勇敢な王子がやってくる。王の娘は彼に望みをかけ、二人して一緒にガラスの山にわけいっていく。しかし姫は山の裂け目に落ちこみ、そこで「赤い騎士」という老人に捕獲されてしまう。この老人は王姫に自分を夫と呼ぶよう強制し、彼女を自分の妻と呼んではばからない。しかし王の娘は、あるとき老人が開いた窓から首をさしいれたときにその髭をつかみ、自分を自由にしなければ放さないと脅かす強硬手段にでた。老人はそれのようにする以外に術がなく、ようやく彼女は逃れて王子に再会し、幸せな結婚を獲得するというのである。
- (11) ドロテー・ゼレ『内面への旅』(東京、日本基督教団出版局)
- (12) ビートルズには1968年の学生反乱以前にすでにいくつかの青年的な社会注解の歌がある。たとえば「シーズ・リービング・ホーム」とともに最も良く知られているのは「ノーウエアマン」「エレノア・リグビー」である。前者は世界を統制しながらも、自分の意見をもたない匿名的「エブリマン」を描きだしているし、後でも二〇世紀の「孤独な群衆」に属する無名な人物を歌いあげる。「シーズ・リービング・ホーム」を含めて、これらは「現代社会の意味と、その社会を構成する諸個人の自己同一性を問うている」[Carl Belz, *The Story of Rock*, (New York: Harper & Row, 1972) pp.

- 145-146] としえよう。
- (13) 河合、前掲書。
- (14) 地中に埋まっている宝を探し出すというのは、精神分析や夢分析では、深い無意識の世界から、輝く自分の発見、新しい自我の誕生を意味する。それは自分の心の中の自己を見いだそうとする精神の試みである。
- (15) マリー・ルイズ・フォン・フランツ『おとぎ話の心理学』（東京・創元社、一九九〇年）特に一四〇ページ以下「おとぎ話における影、アニマ、アニムス」を見よ。
- (16) 山中康裕『絵本と童話のユング心理学』（朝日カルチャーブックス、大阪書籍、一九八六年）。
- (17) アラン・B・チネン『大人のための心理童話・下』（東京、早川書房、一九九五年）一五三ページ。
- (18) Ann Belford Ulanov, *The Feminine in Jungian Psychology and in Christian Theology*, p. 213.
- (19) フォン・フランツ、前掲書。
- (20) デルボーの「森のなかの駅」（一九六〇年）「孤独」（一九五五年）を見よ。
- (21) フォン・フランツ、前掲書。
- (22) Paul Tillich, *Systematic Theology*, vol. 3 (Chicago: University of Chicago Press, 1964) p. 401.
- (23) 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』（中公文庫、昭和五六年）を参照せよ。
- (24) あるいは鳥は異世界の使者であることから、無意識への誘いと考えることもできる。鳥に石を投げるとするのは、五郎兵衛が深層意識の世界への扉を叩いているとも解釈できるかもしれない。
- (25) ソフィアについては、エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー——無意識の女性像の現象学』（東京、ナツメ社、1985年）三五三ページ以下を参照せよ。またフェミニスト神学におけるソフィア論も多くある。
- (26) フォン・フランツ、前掲書。
- (27) ユングも「隠された神」(deus absconditus)、つまり人間の中に内在する神ということを言っているのは興味深い。ユングによれば、意識が広がるプロセスとは、人が次第に自らの神性（それと悪魔性）を知るようになることであり、人間の意識は内に閉じ込められた「神」を解放する責任をもっているのである。ドゥアティ『ユングとティリッヒ』（東京、大明堂、一九八五年）六ページ。
- (28) 濫澤龍彦『エロティシズム』（東京、青土社、一九七三年）に収められた種村季弘の「錬金術と近親相姦」一九ページを

見よ。

- (29) ユングは錬金術について主として二つの著作をもっている。『心理学と錬金術』（一九四四年）は、ヨーロッパの精神史にかんするユングの最初の刊行物であり、ユング八一才の最後の著作『結合の神秘』（一九五六年）も錬金術をテーマとしている。ユングの錬金術の理解については数多くの解説があるが、さしあたり湯浅泰雄『ユングとヨーロッパ精神』（東京、人文書院、一九八〇年）五四―一四九ページを参照せよ。

(30) 湯浅、同上、八四ページ。

(31) フォン・フランツ、前掲書。

(32) チネン、前掲書、一四五ページ。

(33) 河合、前掲書。

(34) ユングは、男と女がともに豊かになるプロセスについて、私たちがこれまで論じてきたような、アニマとアニムスの統合といったことは別の視点も提供している。すなわち知のコンセプトからも理解を試みている。この点は伝統的な神学言語が男性的ロゴスを中心に立てられてきたことを考えると興味深い。そこで後の展開のためにロゴスとエロスの神学言語、フェミニスト神学との関連で少しユングのエクリチュールを紹介しておきたい。

ユングは知恵を、ロゴスとエロスという二つに分類する。ロゴスというのは抽象的、普遍的、論理的な知の形式である。それは自然科学や数学、哲学、形而上学の言葉であって、客観的な観察者の態度を示している。他方エロスの方は、感情、直感、詩的な経験を含み込む知恵である。それは遠くから眺めて判断するのではなく、状況を自分に関わらせる情熱的な知の形式である。伝統的に男はロゴスから出発してやがてエロスに出会う。かたや女はエロスから出発して、ついにはロゴスをその生に引き入れる。ユングによれば、男・女のどちらにとっても、男性的と女性的の知の姿を調和させることによって、成熟が達成される。この意味からすれば、総じてこの物語の前半はエロスの知がロゴ斯的知を、後半はロゴ斯的知がエロスの知の次元を獲得して完成されるさまを描いていると論じられるかもしれない。いづれにせよこの民話全体をとおして、アニマと男性的エゴ、アニムスと女性的エゴとの交渉、そして両者の実りある結合の様子が象徴的に語られていると言えるだろう。男と女との分裂と葛藤、そしてそれらの結合が人の生全体にとって不可欠なことがらであることが論じられているのである。ドゥアライ、前掲書を参照せよ。